

少年の塔慰霊祭

2020.10.7

上伊那教育会では、平和教育研修事業として上伊那各地より満蒙開拓青少年義勇軍として満州へ渡り、再び祖国の地を踏むことのできなかつた青少年の御霊を慰め、平和を誓う慰霊祭を毎年行っています。本年度は10月のさわやかな秋空の下、教育会理事、監事、研修部長、幹事のみで行いました。



青少年の御霊へ永久平和への努力を誓う

追悼の言葉

太平洋戦争終結から、七十五年の歳月が過ぎました。王道楽土の理想に燃え、満蒙開拓青少年義勇軍として中国大陸に渡り、志半ばにして荒野に散った九十余名の若い御霊に、謹んで哀悼の誠を捧げます。

「満州は日本の生命線」と言われ、昭和七年に満州国が誕生しました。計り知れない資源と広大で未開の原野を開拓して「王道楽土」を築き、国内の人口・経済問題を解決すると同時に、軍事的にも北の守りを固めようとする国策の一環として計画された満蒙開拓。貴殿



胸を張り、遙か遠くを見据える少年の像

達 義勇軍もその一翼を担わされたのでした。

国家総動員体制が強化されていく中、上伊那教育会も教師自身率先して大陸に渡り、また上伊那義勇軍父兄会を組織するなど、国策として積極的に取り組み、昭和十二年から終戦までに郡下で約五百名を越える義勇軍を送り出しました。そして、昭和二十年八月九日 対日戦線布告したソ連軍が次々に大陸を南下、「王道楽土・五族協和」の夢は一瞬にして消え去り、関東軍の武装解除は極度の混乱暗澹たる状況の中、貴殿達多くの義勇軍が若き命を落としていくこととなりました。

教えられるままに何の疑問も持たず純心に生き、そして若き命を異境の地に散らせた九十余名の貴殿達。台上に立つ少年の像は胸を張り、遙か遠くの何を見据えているのでしょうか。今、日本や世界の状況に目をやれば、いのちの尊さや平和に対する危機感を抱かざるを得ない出来事も少なくありません。

しかし、私たちは、今ここに頭を垂れ、過ぎ去りし日々思いを寄せると同時に、戦後七十五年を過ぎてなお、この上伊那教育会の負の遺産を決して風化させることなく、真摯に学び、永久平和への努力を改めて誓います。二度と、同じ過ちは繰り返しません。

九十余名の若き御霊よ、安らかにお眠りください。

令和二年十月七日

公益社団法人上伊那教育会

会長 小澤 徳夫